

空間政治学の名著として

— G・L・モッセ 『大衆の国民化—ナチズムに至る政治シンボルと大衆文化』 —

比護 遥

一 「現代の古典」としてのモッセ史学

一九七五年に原著が出たジョージ・L・モッセ（一九一八—一九九）の『大衆の国民化』が、日本語に翻訳されて柏書房から刊行されたのが一九九四年（佐藤卓己・佐藤八寿子訳）。その後、二〇〇五年にかけてさらに五冊のモッセの著作が相次いで訳出されることになった。このドイツ史家のイタリヤにおける受容は一冊の本としてまとめられるまでもなっているが^①、同じくかつての「枢軸国」である日本で高い関心が寄せられたというのも、偶然ではなからう。この翻訳熱の呼び水と言うべき本書が、昨年（二〇二一年）、ちくま

学芸文庫から再刊された。

「政治シンボルと大衆文化」という本書の視座は、今日多くの研究で取り入れられるところとなり、それ自体は今読んで大きな驚きを覚えるというほどではない。しかし、これは本書の凡庸さを示すものではなく、むしろ「現代の古典」としての地歩を築いた証左と言える。古典には古典としての読み方がある。

訳者の一人である佐藤卓己は、既に二つの側面から本書を「名著」として紹介している。第一に、「ナショナリズム論の名著」として^②。「国民化」概念の重要性を指摘したうえで、「エリック・J・ホブズボームが『伝統の大量生産』（『創られた伝統』所収）の冒頭で

注記しているように、構築主義的ナショナリズム論の先駆としても評価できる」としている。

そして第二に、「メディア論の名著」として^(三)。メディア情報を通して「大衆の国民化」を捉える視点は、その後の佐藤自らのメディア史研究により、近代日本にも適用されていたということができよう^(四)。

本書評では、「空間政治学の名著」という側面に注目してみたい^(五)。もともと、以上の三つは決して分けられるものではなく、むしろそれらが一体となった歴史記述となっている点が本書の魅力だろう。また、評者はドイツ史に明るくないだけではなく、空間政治学というこの新興の研究領域について自信をもって論じられるほどの知識があるわけでもない。

ただ、「ヒトラーの成功はどのように説明できるのか？」（九頁＝文庫版、以下同）という問いから始まる本書を読むとき、中国現代史に関心を持つ評者は、「毛沢東の成功はどのように説明できるのか？」という問いをおのずと念頭に置くことになった。そのときに、

国民的記念碑と「聖なる空間」をめぐる本書の記述から、自然と北京にある人民英雄記念碑、そしてそれを取り囲む天安門広場を想起した。本書の空間をめぐる鋭敏な観察が魅力的かつ示唆的であったために、この視点から本書を紹介してみたいと思ったまでである。

続く第二節で前記の視座に立ちつつ本書の要約を簡単にしただけで、第三節・第四節で、近年の空間政治学の研究動向を踏まえつつ、本書の「現代の古典」としての読み方の可能性を提示してみたい。その際には、著者自らが謝辞で「この方法はドイツ以外の国にも適応し得るに違いない」（二四頁）と述べていることを踏まえて、とりわけ東アジア研究においてどのように本書の知見が生かせるかということを意識する。

二 「聖なる空間」のドイツ近現代史

（一）ナチズムに至る「新しい政治」

本書全体の概要を手っ取り早く把握するためには、

まずは「日本語版への序文」を一読するのがいいだろう。ナチ党の権力掌握を理解するに当たり、本書が注目するのは従来の意味での政治史ではなく、「新しい政治」、すなわちシンボルと神話と大衆的示威運動を通して「いかに一般大衆を国民国家に組み込み、いかに彼らに帰属感を与えることができるか」（九頁）という「ドラマとしての『政治』」（二〇頁）である。

原書の副題に「ナポレオン戦争から第三帝国まで」とあるように、ナチズムに主たる関心があるとはいえず、記述の分量としては、むしろそれ以前の時期についての方が多い。「新しい政治」はナチ党の独創ではなく、むしろ一九世紀からの連続性がみられるという立場に立つからである。「クライマックス」としての第三帝国を常に参照軸としつつ、様々な角度からそれぞれ源流に遡って記述する構成になっている。このために全体を通してメッセージは明確になっているものの、注意深く読まなければ、それぞれの個所でどの時代について論じているかを見失うことになるかもしれない。

（二）「新しい政治」の美学

第一章と第二章は、「新しい政治」の特徴、そしてそれを下支えする「政治の美学」を説明する総論となっている。ファシズムと言えば「大規模な大衆集会、びっしり並んだ人の列、そして色鮮やかな旗」（一九頁）を思い浮かべることは容易だろう。ここに表れる「政治活動を一個のドラマに変える」（一九頁）政治様式こそが「新しい政治」であり、それは世俗宗教とも呼べるものだ。これは二〇世紀半ばに初めて現れたものではなく、その出発点はナポレオンの支配に抵抗した解放戦争が行われた一九世紀初頭まで遡ることができる。ここで重要な「社会における統合要素」（四八頁）としての「美」の理想型である。そして、「この美の最も重要な理想は、古典古代、とりわけギリシアに由来する」（五一頁）。一八世紀後半にギリシア芸術の美を再発見したのが、ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマン（一七二七—一七八）である。古典主義の様式の芸術や

建築は、均整及び形式の統一というこの美の概念を理想としたものだ。

一九世紀に多く作られる国民的記念碑においても、このギリシア趣味が広く見られる。しかし、ここでは、ヴィンケルマン独自の美の定義からの重大な変化も見られる。簡素さというのに代わって、むしろ壮大さと混同されるようになったのである。すなわち、国民の威光の象徴として、「記念碑は広大な範囲から見えるもので、それを取り巻く自然環境を威圧するものでなくてはならなかった」(六三頁)。この「記念碑的壮大さ」への衝動は公的祝祭においても見られるものだ。

「記念碑的壮大さ」には実用的な意味もあった。なぜならば、「大衆運動には、祝祭に参加する人々を収容できる広い空間が必要だった」(六五頁)からだ。かくして、国民的記念碑に向かい合う「聖なる空間」が形成されていくことになる。これこそが、「新しい世俗宗教の教会」(八五頁)なのである。

(三) 国民的記念碑が作り出す空間

第三章から第七章は「政治的祭祀」を複数の側面から具体的に分析する各論にあたるが、その大まかな構成は、筆者による「ドラマ」という比喩を踏まえるならば、次のように理解できるだろう。すなわち、ドラマが演じられる舞台装置について論じたのが第三章、演目についての第四章と第五章、そして演者についての第六章と第七章である。本書の空間政治学としての側面に着目するこの書評では、主に舞台装置についての第三章を重点的に取り上げる。

「国民が賛同するはずの理想の具現化」(八九頁)としての国民的記念碑が生まれたのは、一九世紀初頭のことである。ギリシアの美と記念碑的壮大さを持つローマ様式に影響を受けた重要な建築家として、フリードリヒ・ジリー(一七二一—一八〇〇)がいる。彼が提示した古典主義的模範はその後も踏襲された。代表的なものは、ドイツ統一を祈願するべく、一八三〇年から一八四二年にかけてギリシア神殿を模して建てら

れたヴァルハラである。ただし、「混み入った内装は美術館に似ており、国民的祝祭を開くような余地はそこにはなかった」(二〇二頁)。

ドイツ帝国成立(一八七一年)によりドイツ統一が実現した直後の一八七五年に完成したヘルマン記念碑は、寄付により人々の能動的な参加を呼び掛けた点、そして竣工の際にそれを取り囲む式典が催されたという点において、新しい展開となった。トイトブルクの森にある丘の上に記念碑はそびえたっており、周囲の環境と合わさって「聖なる空間」を形成している。

その後にできたニードーヴァルト記念碑(一八八三年)とキフホイザー記念碑(一八九六年)は、「どちらが真の国民的祝祭にとってよりよい舞台装置となるか」(一一四頁)という点において競合することになった。

この時期には、「記念碑は単に一つの党派や集団の愛国心を表現するだけではなく、すべての民衆を巻き込まねばならないと考えられるようになった」(同)のである。この競争において有利となった後者には、国民的

祝祭のための空間が備わっていた。かくして、「墓石の場ではなく国民的祭儀を演じる生きた人々の場となり、死の空間から生の空間へと変容」(一一六頁)する中で、国民的記念碑は国民的祝祭とますます分かち難くなっていた。

第一次世界大戦後になると、「熱に浮かされた大衆が大規模に成長する一方、国民的祝祭の形をとった大衆集会は広く使われる政治技術」(二二四頁)となり、それまでの国民的記念碑の空間では不十分であるとみなされるようになった。ワイマル共和国(一九一九―二三)に建造され成功した唯一の記念碑と呼びうるタンネンベルク記念碑(一九二七年)は、ナチ党の空間的理想をも満足させるものだった。ここでは、十万人規模の集会を開くことのできる空間を、八つの巨大な塔が取り囲んでいる。「広大な「聖なる空間」に取り囲まれた記念碑というより、その空間を取り囲む記念碑」(二二五頁)となったのである。これはナチ党のニルンベルク党大会会場の空間利用とも一致しており、

「祝祭の空間が記念碑そのものにとつて代わる地点に到達したシンボルの進化の一段階が確かに提示されていた」(二二七頁)。

第四章と第五章は、国民的記念碑やそれを取り囲む「聖なる空間」という舞台装置で演じられる公的祝祭が主題であり、第六章と第七章では、国民的祝祭の担い手となる体操家、男子合唱団、射撃協会、モダンダンスといった諸組織、そして労働者に焦点があてられる。

(四)「クライマックス」としての第三帝国

百年以上にわたる国民的祭祀の展開の「クライマックス」としての第三帝国を理解するうえで欠かせないのが、ヒトラー自身的美意識で有り、第八章の主題となっている。彼が古典古代様式に愛着を持つようになったのは、青年時代を過ごしたウィーンでのことだ。ここで古典主義的とされたのは、やはり記念碑的壮大さのことであり、巨大な装飾的階段にこだわりの持つ

ていた。「ヒトラーにとつて建造物がもたらす印象は建造物が本来持つ機能と同じほど大切であり、この印象は空間の壮大さによつて伝えられねばならないとされた」(三〇五頁)のである。

現代的なものや工業的なものを排した田園的ドイツへの憧憬を持ちつつも、国民的儀礼は都市の真ん中で行われなければならないと考えていた。党の祝典に誰でも容易に参入できること(三二四頁)が、政治上の要請だったからである。この発想を具現化したものが、実現しなかったベルリンの都市改造計画である。こうしたヒトラーの保守的な美意識は、民衆の趣味と一致するものであったことも指摘されている。

第九章は全体の結論にあたるが、世俗宗教に先立つキリスト教の典礼形式の空間概念にまでさかのぼって「聖なる空間」についてまとめた個所のみ引用しておく。「シンボリックな行為のみが行われる『聖なる空間』の観念は、原始時代、またやがてキリスト教に取って代わられる異教的崇拜にまでさかのぼる。そのよ

うな空間は、有史以来、祭儀行為に必要な前提と考えられてきた。「新しい政治」は、儀礼的演説をはじめパレード、行進、体操演技、ダンスで、この聖なる空間を満たす効果的な方法の一つと見なしてよからう（三四〇頁）。

三 比較軸としての「聖なる空間」

ここまで、本書が空間に対する鋭い感覚を持ち合わせていることを、要約により示してきた。本節では、日本と中国の関連する研究の概観を通して、本書の示唆をさらに検討することにした。

『皇居前広場』（初版二〇〇三年）において、「建築学のこれまでの成果に政治学を融合させた「空間政治学」の試み」を提唱した政治学者の原武史は、モッセを直接引用してはいないものの、同書において「聖なる空間」という言葉を用いている^(六)。すなわち、「引用者注…一九」二八年の昭和大礼を機に、関東地方や

全国、あるいは植民地や「満洲国」の代表が集まって、観閲式や記念式典、奉祝会、観兵式など、天皇を主体とする多様な儀礼が頻繁に行われるようになることで、広場は完全な「聖なる空間」となる^(七)。戦後は占領軍と左翼勢力がこの空間を埋めるようになるも、一九五二年以降は「空虚な中心」へと転じた。

今となつては「何もない空間」となった皇居前広場とは対照的なのが、北京の天安門広場である。これの研究の先鞭をつけたのが、美術史家のウー・ホンによる『北京をつくりなおす―政治空間としての天安門広場』（原書二〇〇五年）だ。天安門広場が今ある場所は、かつては塀で囲まれた狭い空間であり、中華人民共和国の成立後に現在のように大衆集会も可能な広い広場へと拡張されていくことになる。「新しい北京と中華人民共和国の中心になるために、天安門広場それ自身が、帝国の隔絶された区画から、政治活動とヴィジュアルな表現のための開かれた空間へと変貌しなければならなかった」のである^(八)。

毛沢東時代の政治文化を『マオの新世界』(二〇一一年)としてまとめた歴史学者の洪長泰もまた、天安門広場を取り囲む人民大会堂などの「十大建築」、そして中央にある人民英雄記念碑の建設過程を論じている^(五)。洪によれば、ドイツやソ連の先例と同様、中華人民共和国においても巨大建築は政治的権力の象徴となるべきものであった。

このように、国民的祭儀とそのための空間を意図的に設計するという点においては、『大衆の国民化』の分析は天安門広場にもかなり適用できようである^(六)。もちろん、小野寺史郎が手際よく整理しているように、人民共和国の構成員と当初された「人民」とは、恣意的に指定される「人民の敵」を「国民」から排除したものであり、その点において「国民化」の言葉がそのまま使えるかどうかは留保があるだろうが、社会主義に民族主義・愛国主義を結び付けたのは他ならぬ中国共産党であった^(七)。

ただし、ナポレオン戦争から第三帝国への連続性に

着目する本書の指摘を踏まえるならば、果たして祝祭的な空間利用は「新中国」の独創だったのかということも疑ってしかるべきだろう。この点からの最新の快著が、「革命史観」の「正史」を超えて、天安門広場誕生の「前日譚」に焦点を当てた、建築史家の市川紘司による『天安門広場―中国国民広場の空間史』(二〇二〇年)である^(八)。都市の真ん中にある「巨大な空隙」を、様々なアクターが儀礼空間として争奪し合った近代」の様相が描かれている。

こうして見れば、「聖なる空間」の形成というのは、各国における国民国家形成の特質を知る重要な手がかりとなることがわかるし、『大衆の国民化』は国際比較研究への手がかりともなる古典と言えるだろう。次節では、このような「比較」をしていくうえで、さらに注意したい点について述べることにする。

四 古代ギリシアの空間理想の射程

本書において興味深いのは、近現代ドイツの国民的記念碑において、一貫として古代ギリシアが理想とされていたという指摘である。国民的記念碑というからには、ゲルマン民族固有の建築が追求されそうなるものであるし、実際にその意匠が折衷的に取り入れられることもあったとはいえ、古典主義様式の基調が揺らぐことは基本的にはなかった。とりわけヒトラーは、「想像上の古代ゲルマン的伝統の模造を軽蔑」（二〇九頁）さえしていた。

この意味をさらに考えるうえでヒントになりそうなのが、歴史学者の全鎮晟（チョン・ジンソン）による『虚像のアテネーベルリン、東京、ソウルの記憶と空間』（原書二〇一五年）である¹¹¹⁾。全は、プロイセン古典主義を代表する建築家、カール・フリードリヒ・シッケル（二七八―一八四二）に注目する。シッケルの名前は、彼が師事したジリーとともに『大衆の国民化』においても登場する。「合目的性と美的形式の有機的統一」を志向する彼の建築原理としての「テクト

ニク」が、国家統治の領域にまで拡大され、ベルリンの都市計画にも反映された。そして、その建築は西洋近代文明の優越性と権威を視覚的に代弁するものとして、植民都市の青島へと移植される。

他方で、プロイセン式の国家テクトニクの原理を能動的に受容したのが明治時代の日本であり、新たな首都としての東京の都市空間として具現化された。そして、さらにそれが、植民地の京城（ソウル）へと移植されていく。戦後になって韓国が植民地支配から脱しようとしたときに、多くの場合、西欧的で「近代的な」建築はそのままに残された。

このように、近代において民族文化を確立するうえで見出されたのは、理想化された「想像のアテネ」のイメージであり、それが植民地主義と結びつきながら転移していく中で、むしろ内在する矛盾が先鋭的に表出していったというのである。

ちなみに、徐蘇斌の論文によれば、一九三〇年代に日本に留学した経験を持つ建築家の趙冬日（一九一四

―二〇〇五―が設計した北京の人民大会堂もまた、民族性と社会主義の表現が求められた中で、西洋古典様式を想起させる列柱が特徴的な折衷様式の巨大建築となった^(四)。もちろん他方で、天安門広場の正面にある建築が清朝から引き継いだ紫禁城であったことも踏まえば、その空間の性質はより複雑なものになる。いずれにせよ、『大衆の国民化』の文庫化を機に、各国史の研究者に読まれることを通して、このような「連鎖」の観点を含んだ比較史的な空間政治学研究へと発展していくことを望みたい。

(1) Lorenzo Benadusi and Giorgio Caravale, *George L. Mosse's *huby*: Interpretation, Reception, and Intellectual Heritage*, New York: Palgrave Macmillan, 2014.

(2) 佐藤卓己「G・L・モッセ『大衆の国民化』大澤真幸編『ナショナリズム論の名著50』平凡社、二〇〇二年、二〇九―二九頁。

(3) 佐藤卓己『メディア論の名著30』筑摩書房、二〇二〇年、五七―六六頁。

(4) 例えば、佐藤卓己『キング』の時代―国民大衆雑誌の公共性』岩波書店、二〇二〇年。

(5) 「空間政治学」というのは、後述するように、日本では原武史が提唱した名称である。近年、その問題関心に連なる研究が国内外で多く出てい

るものの、必ずしも「空間政治学」という言葉を使っているとは限らない。ただ、本稿では、簡潔かつ包括的であるこの名称でまとめることにしたい。

なお、この領域における詳細な先行研究レビューを含んだ最新の研究成果として、佐藤信「近代日本の統治と空間」私邸・別荘・庁舎』東京大学出版会、二〇二〇年を参照。

(6) 原武史「増補 皇居前広場」筑摩書房、二〇〇七年、一五頁。

(7) 同右、三二頁。

(8) ウー・ホン、中野美代子監訳『北京をつくりなおす―政治空間としての天安門広場』国書刊行会、二〇一五年、一一頁。

(9) Chang-tai Hung, *Mao's New World: Political Culture in the Early People's Republic*, Ithaca: Cornell University Press, 2011.

(10) なお、シンボルと政治について論じた中国現代史の研究書としては、下記も参照のこと。Henrietta Harrison, *The Making of the Republican Citizen: Political Ceremonies and Symbols in China, 1911-1929*, Oxford: Oxford University Press, 2000.

小野寺史郎『国旗・国歌・国慶 ナショナリズムとシンボルの中国近代史』東京大学出版会、二〇一二年。また、中国建築に関する優れた空間論として、村松伸『中華中毒―中国的空間の解剖学』筑摩書房、二〇二三年も参照。

(11) 小野寺史郎『中国ナショナリズム―民族と愛国の近現代史』中央公論新社、二〇一七年。

(12) 市川絃司『天安門広場 中国国民広場の空間史』筑摩書房、二〇二〇年。

(13) 全鍾成、佐藤静香訳『虚像のアテネ―ベルリン、東京、ソウルの記憶と空間』法政大学出版局、二〇一九年。

(14) 徐蘇斌「中国現代建築の成立基盤―留日建築家・趙冬日と人民大会堂」『第140回 日文研フォーラム』国際日本文化研究センター、二〇〇一年 (<http://doi.org/10.1505/0005676>)。